

追悼

本質を考え続けた、芳賀正憲さんを悼む

私たちに絶えず知的な刺激を与えてくださった芳賀正憲さんが2023年1月9日にお亡くなりになりました。心よりお悔み申し上げます。

芳賀さんは、2007年6月25日発行のメルマガで「情報システムの本質に迫る」と題した連載を開始され、2023年1月1日発行の前号まで実に16年近くにわたって187回の寄稿をなさっています。これを通じて情報システム学の理論や方法論の考察を深められ、その成果を『新情報システム学序説』（本学会発行）でも展開されました。連載ではさらに、情報システムにかんする具体的事象はもとより、日本の国際競争力の低下をはじめとする諸問題にまで広く関心を寄せて情報システムの視点から独自の論考を発表されています。これらの功績によって芳賀さんは第2回浦昭二記念賞特別賞を授与されました。

上記のとおり芳賀さんの功績と本学会への貢献は非常に大きいのですが、それだけでなく、私にとっては忘れがたい思い出も数多く残されました。研究会や本の打ち合わせで一緒に過ごしたとき、澄んだ声ではっきりと誰にも忖度せず持論を述べる姿がとりわけ強く印象に残っています。

芳賀さんは発言の冒頭でよく、「浦昭二先生は、情報システム学とは世の中の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉え、そこに横たわる問題を究明し、そのあり様を改善することを目指す実践的な学問であるとおっしゃっていました」と紹介されました。世の中の仕組みを考察の対象とすると、参照学問領域はいきおい多岐にわたることになります。それでも、浦先生のお考えを自らの思考の出発点として情報システム学の体系化を目指すという姿勢は揺るぎないものでした。

そして2016年には、「もともと世の中の仕組みを考察していたのが他の多くの学問分野であることを考えると、新しい情報システム学は、多岐にわたる学問分野を、参照ではなく、情報とシステムの観点で抽象化し、本質モデル化、すなわち“深層学習”したものであり、情報システム学は他の分野に対するメタ学問であると位置づけることができる」という見解を披露しています（情報システム学会誌12巻第1号「巻頭言：情報システム学の新しい展開」参照：https://www.issj.net/journal/jissj/Vol12_No1_Open/A0V12N1.pdf）。情報システム学を他の多くの学問分野の本質モデル、メタ学問に位置付けるという、この壮大な構想を聞いた時の驚きは今も忘れることができません。

芳賀さんの考察にとりわけ大きな影響を与えたのは、今道友信先生のエコエティカ（生圏倫理学）と西垣通先生の基礎情報学だったと思われます。いずれも学会内に研究会が設けられました。

芳賀さんは連載の第1回で、日本の大学の「情報」テキストに「情報は形がない」と記述されているのを強く批判しています。英語の information の form はプラトンのアイデアすなわち「精神で見た形」を意味するもので、現実世界を概念化したものが情報だということです。そして、「情報の反対概念はエントロピーだと思いこんでいた」が、そうではなく「incarnation（具体化、キリスト教における受肉）」であることを今道先生から学んだと記述しています（『人間中心の情報システム学 その歩みと未来—浦昭二の世界—』142頁参照）。西垣先生の理論の重要性を説いたのも、「情報」の基礎的な概念が不明確なまま情報教育が行われている現状を問題視していたためだと思われます。『新情報システム学序説』の「第1章 情報とは何か」では、冒頭で「生命情報」「社会情報」「機械情報」という基礎情報学の概念を紹介することから記述を始めています。

さて、本学会は近く『新情報システム学序説』の改訂版を出版する予定です。2019年の夏、その打ち合わせで学会事務所付近のカフェに芳賀さんを含めた共同執筆者3～4人が幾度か集まり、ランチをいただきながら打ち合わせをしたことが懐かしく思い出されます。その後、新型コロナのため学会活動もオンラインへ移行しました。学会のイベントで久しぶりの対面再会となったとき、笑顔で「やあ」と手をあげて元気に挨拶してくださったのが昨日のここのように思われます。

本の完成を待たずに芳賀さんが旅立たれたのは残念でなりません。しかし、命が尽きるまで情報システムの本質を考え続けるという稀有な人生を歩まれたことを、きっと誇りに思っ
ていらっしやるに違いありません。

学問は新しい世代へのプレゼントであると思います。改定版で芳賀さんが執筆された論文は私たちへの最後の贈り物です。私はそれを大切にしていきたいと思います。

2023年2月 会長 砂田 薫